

2022年度 早稲田大学大学院文学研究科 入学試験問題  
 【修士課程】 専門科目 現代文Ⅱ コース ※解答は別紙（縦・横書）

I 以下の設問（共通問題）に答えなさい。

【設問】 以下に掲げる、谷川俊太郎と高橋睦郎の対談の一節を読み、下線部について、対象を詩に限定せずひろく文学に適用し、具体的な例を挙げながら自由に論じなさい。

谷川 （略）新しい書き方を追求していこうという思いはもちろんあります。僕は大学にも行ってないし、決まった勤め先も持たないままこれまで生きてきた。言ってみれば、筆一本で生活を始めて、物書きとして生き続けて今に至ります。だから、読者というのは常に必要だったし、それはお金の面だけではなく、自分にとっての一種の生きがいとして、読んでくれる人がいることが書く上での手応えになってきた。だから、読者を退屈させちゃいけないという、ほとんど道德感に近いものがあつたわけです。あるパターンが続くと、「こんなことを続けていていいのかな。読者は退屈するんじゃないか？」と思ってしまう。そうすると、特段工夫をしなくても、自然と違う作風のものが出てくるんですよ。そうした新しいスタイルが生まれると、「あ、このやり方で続けられるな」となる。でも、また「飽きられてしまうのでは？」となって……その繰り返しですね。たぶん、今年中に出る新しい詩集も、前のは全然違うような作品になるのではないのでしょうか。ただ最近、ちょっと枯れてきているな、みたいに思ったりすることはあります。前の自分——例えば中年の頃の作品を読み返すと、その頃の自分に嫉妬するわけです。「こんな詩を書いてたんだ、俺は。いいじゃねえか」って（笑）。やはり年を取るということはそうしたマイナス面も当然含んでいくものなのでしょうね。

高橋 僕も、かつての自分が書いた作品を読み返して、羨ましいと思うようなこともないわけではありません。確かに「ああ、自分がかつてこんなものを書いていたんだ！」という驚き、「もうこんなものは書けない！」という不可逆ゆえの愛惜もあります。でも一方で、それはもう「自分の作品ではない」というくらい遠い存在になってしまっている。いずれにせよ、書くものが自然と変わっていく谷川さんの在り方をずっと見てきて、僕もそうあらねば、という一つの模範になっていることは間違いありません。ただ、自分とは見事に違うなと思うのは、これは僕の自信のなさの表れでもあるのですが、谷川さんの作品は——これは比喻ですけれども——全部ローマ字における小文字で書かれた詩だと思っんです。一方の僕は、それが全部大文字なんです。

\*谷川俊太郎・高橋睦郎「雪のように溶ける詩を目指して」（「文学界」2021年度5月号）

II 以下の設問(共通問題)に答えなさい。

【設問】 以下に掲げる文章の下線部(「〈帝国〉からの文化への外的圧力」「帝国の存在の浸潤」「帝国の影響」)が指している現象に言及しつつ、個人的に関心のある国民文学、または地域の文学(日本文学、東アジア文学、中東文学等)から具体例を一つ取り上げ、その事例に見られる19世紀以降における世界文学の流通、普及、そして受容の特徴について論じなさい。

それと同じようにコンラッドの物語は、帝国の勝利に対する反動として存在する。コンラッドの中編小説や長編小説は、ある意味で、最盛期の帝国主義事業の攻撃的なあざとさをそのまま受け継いでいるところがあるとすれば、また別の意味で、ポスト・リアリズム時代のモダニズム的感性の、容易にみてとれるかたちでアイロニックな覚醒という特徴もおびている。コンラッド、フォースター、マルロー、T・E・ロレンスは、帝国主義万歳の自信にみちた経験から生みだされてきた物語を、自意識と断絶と自己言及性と腐食的アイロニーからなる極限状態へと変容させたのだが、この形式上のパターンこそ、ほかでもない、わたしたちがモダニズム文化の指標として、ジョイスやT・S・エリオットやプルーストやマンやイエイツの主要な作品をもふくむ文化の指標として認識するにいたったものそのものなのだ。モダニズム文化のもっとも際だった特徴の多くを、わたしたちは西洋の社会や文化における純粋に内的な力学から生まれたものとみなしがちだが、それはまた〈帝国〉からの文化への外的圧力に対する応答とも無関係ではない。こう考えると、これはたしかにコンラッドの全作品にあてはまるし、フォースターや、T・E・ロレンスやマルローの小説についても、おのおの独自のかたちであてはまることだろう。アイルランドの感性に対する帝国の存在の浸潤は、イエイツやジョイスの作品においてその名残をとどめているし、アメリカ出身の国籍離脱者に対する帝国の影響は、エリオットやパウンドの作品にその名残をとどめている。

\*エドワード・W・サイード「モダニズムについての覚書」(『文化と帝国主義1』所収、みすず書房、1998年)

※Web掲載に際し、著作権者からの要請により、出典を追記しております。  
CULTURE AND IMPERIALISM by Edward Said. Copyright © Edward W. Said, 1993, used by permission of The Wylie Agency (UK) Limited.

Ⅲ 下の1~15の設問事項から5項目を選び、それぞれについて200字以内で説明せよ。  
\*記入は順不同でもよいが、設問項目番号は解答欄左上の空欄に明記すること。

- 1 アーネスト・ヘミングウェイ
- 2 マリーズ・コンデ
- 3 岡本かの子
- 4 スタニスワフ・レム
- 5 ヴァージニア・ウルフ
- 6 ガヤトリ・C・スピヴァク
- 7 アリス・マンロー
- 8 フェルナンド・ペソア
- 9 『伝奇集』
- 10 『雨月物語』
- 11 『審判』
- 12 デイストピア
- 13 ネグリチュード
- 14 ネイチャーライティング
- 15 マンスプレイニング



Lined writing area with horizontal lines.

(次頁へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——



(次頁へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——





